

子どもの成長

—発達障害—

19-1029

都築 えりか

目次

はじめに	P 2
第 1 章	
第 1 節 主な発達障害について	P 3
第 2 節 それぞれの特徴と症状	P 3～5
第 3 節 主な発達障害の関係	P 6
第 2 章	
第 1 節 発達障害と食物アレルギー	P 7
第 2 節 検査方法	P 7～8
第 3 節 食事の改善	P 8～9
第 4 節 食物アレルギー年齢別主要抗原表	P 9
まとめ	P 1 0

はじめに

すべての子どもたちはいろいろな可能性と個性をともにもって生まれてくる。

人間の初期の発達過程が何らかの原因によって阻害され、認知、言語、社会性、運動などの機能の獲得が障害された状態を「発達障害」と呼ぶ。基本的には脳の機能的な問題が原因で起こるもので、知的障害、広汎性発達障害(自閉症)、高機能広汎性発達障害(アスペルガー症候群、高機能自閉症)、注意欠陥多動性障害(AD/DH)、学習障害(LD)などがある。

発達障害の原因は、遺伝子異常、染色体異常、体内環境の異常、周産期の異常、生まれた後の病気や環境など様々だが、多くの場合原因はわからない。

発達障害をもつ親の会では、発達障害を生まれながらの可能性や個性のあり方の1つだと考え、成長の中で困ることがなければ障害と考える必要はないと考えている。薬など医学的な治療の対象となることは少なく、療育や教育の中でどのように関わるかが問題とされることになる。

障害の程度が軽く、一見普通と変わらない子どもたちを「軽度発達障害」と呼び、高機能広汎性発達障害(アスペルガー症候群、高機能自閉症)、注意欠陥多動性障害(AD/HD)、学習障害(LD)の3つが代表的なものである。障害が分かりにくいいため、社会での認知度が低く、わがままや育て方の問題などとされていることが少なくない。生活上の問題は決して軽度ではない。学童期の子どもの5～6%が軽度発達障害と考えられており、とくに教育現場での適切な対応が求められている。

人々が発達障害の子どもたちのことを正しく理解し、その子が「困ること」を正しく把握することでよりよく発達障害の子どもたちが生きていけることになる。

第1章

1節 主な発達障害について

・精神遅滞、境界領域知能

話す力や言葉の理解、形を認識する力や状況を理解する力などの知的な機能が年齢に比して全般的に低いレベルにあり、社会生活をしていく上で理解と支援が必要な状態を精神遅滞（知的障害）という。

環境を選べば、自立しての社会適応が可能と考えられるが、状況によっては理解と支援が必要なレベルである。特に今の教育環境（小・中学校）では特別な配慮が必要なことが多くある。

子どもの機能を客観的に把握し、子どもに合った指導環境を整えることが必要である。その子なりの努力や得意なところを認め、認めたことは、子ども自身にも、また、周囲の子どもたちにも伝わるようにすることも大切。

2節 それぞれの特徴と症状

・高機能広汎性発達障害(アスペルガー症候群・高機能自閉症)

広汎性発達障害とは、

- ① 対人関係が薄くて社会性の発達が悪い
- ② コミュニケーションの障害がある
- ③ 想像力の障害が根底にあって興味・活動が限られ、強いこだわりがある、反復的な行動（常同行動）がみられることがある、という特徴を3歳以前から持っている人のことをいう。

その中で、それぞれの特徴が顕著である場合は「自閉症、自閉性障害」、特徴はあるけれど症状がそれほど強くない、一部の症状は目立たない、あるいは発症年齢が遅いといった場合は「非定型自閉症、特定不能の広汎性発達障害」と判断する。

また、知的発達の遅れや言葉の発達の遅れがない、そして、対人関係以外では、ある程度適応能力をもっているものをアスペルガー症候群と診断する。

広汎性発達障害の人は、これらの特徴の他、程度の差はあるが、他の人と喜んだり、悲しんだり、感動したりといった感情を共有しにくく、他の人がどのように感じているかを察知することが難しい、見通しが付かないと著しく不安になる、また定の音や状況に敏感すぎる、時間の感覚が普通と違う、など感覚、感性の特異さも併せ持っている。

基本的な対応は、人との関わり方や基本的なルール、身の回りのことを教え、見通しが持てるように説明を加えて、安心して集団生活を送れるよう配慮する。

得意なことを持っていることが多いため、それも認めて自信をつけるようにしていくと、少しずつまわりのことも見えてきて集団生活に適応する行動も増え、学習にも意欲を見せることが多くある。好きなことには人一倍熱中し、時には特定の分野で高い能力を発揮して認められる人もいる。

とくにアスペルガー症候群は、前述の特徴を持つが、環境によっては障害として支援を受ける必要はない「個性」といえる。

ただ理解されない環境では、不安、過敏、こだわりなどの情緒障害を強めてしまい、社会への適応が困難ともなる。

・注意欠陥多動性障害

日常生活に著しく支障を来すほど多動、注意集中困難、注意転導、衝動性が目立つ人のことをいう。

- ① こころの中に情報を留めて置き、それを引き出すこと（ワーキングメモリー）
- ② 発語の自己コントロール
- ③ 気分、覚醒状態の制御
- ④ 行動を分析して新しい行動を作り出す能力

の低下などがある。

言われたこと、見たことをすぐ忘れてしまったり、不適切におしゃべりしたり、興奮しやすかったり、しっかり目覚めてないといけないときに眠たくなってしまったりもする。

また、失敗して反省したつもりでも、同じことを繰り返してしまったりもする。自己中心性が目立ち、ひどく反抗的な子どももいる。こだわりや切り替えの悪さがある、好きなことには熱中もしやすいこともある。また、刺激へ過敏に反応しすぎる子もいる。

ただ、ADHDは他の発達障害と大きく違って、症状やその程度が状況や年齢でかなり変化する。多くの子は、小学校高学年ころになると問題が少なくなって周囲に適応していく。

さらに大人になると、ADHDの特徴が残っていても、本人が自ら適した環境や適した職業を選ぶことができるようになり、のびのびと生活し、むしろ個性的な仕事で認められるようになる人も多くある。

ある程度の自己中心性や反抗心、衝動的な行動力、多少落ち着きなく注意が移りやすい中でのひらめきや、興味のあることへの熱中は長所ともなりえる。

ただし、極端に自信をなくしたり、対人関係や自分の将来に大きな不安をもったり、

人間不信に陥ってしまったりすると、さまざまな情緒面の問題を起こしてくることがある。

特徴を理解しつつ、できるだけ小さい時期から、社会参加に必要なできるだけ小さな時期から、社会参加に必要な人とのやり取りの仕方や基本的なルールを教え、行動や情緒を自己コントロールする力を養うこと。また、その子なりの努力を評価し、得意なところも見いだし自身を育むこと。

PDDに近い社会性の問題を持つ場合は、特に人との関わり方、やり取りを丁寧に学ばせていく必要がある。

•学習障害

全般的な知的発達の遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する、または推論する能力の習得と使用に著しい困難を示すものと定義される。このためにLDの子は学習に支障をきたすが、その影響は日常生活にまで及ぶことが多くある。

このような子どもは、一部の能力のみが劣っているため、周囲にそのことが分かりにくく、一部の能力が発揮できないのは、なまけているから、わざとやろうとしないなど理解されていないことがある。また、不得意な部分が目立つために、知的発達全体が遅れていると誤解されることもある。苦手意識のため苦手な学習や作業を拒否する二次的な問題も出てきやすい。

基本的発達では、心理発達を客観的に評価し、得意な部分は自信に繋げ、苦手な部分では、子どもなりの努力を認めるとともに、子どもに合った指導を考える。得意な部分で苦手な部分をカバーすることを考えていくことも必要である。

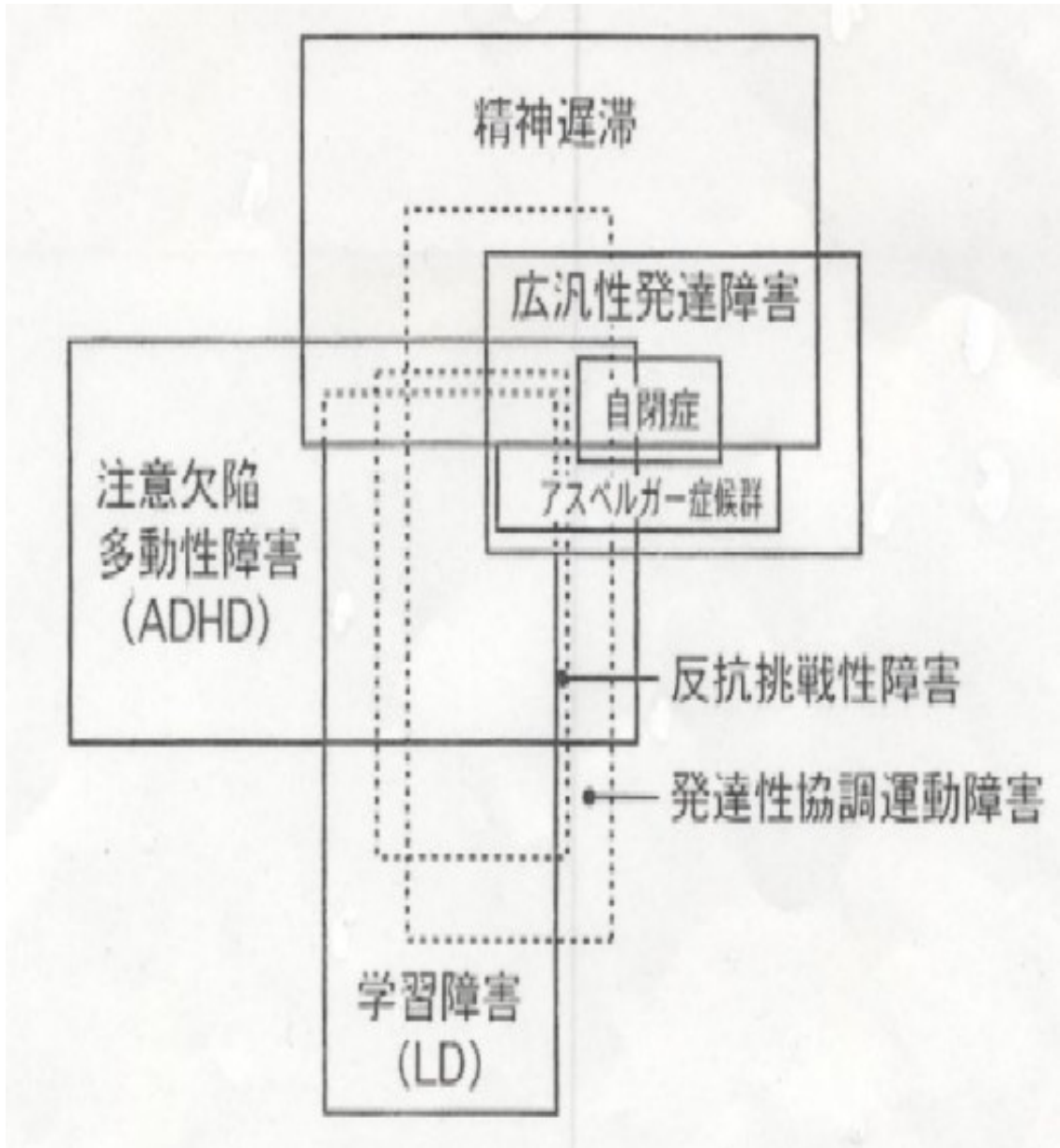
•発達性強調運動障害

手足の麻痺はないが、動きの協調が必要な動作に障害がある。すなわち、著しい不器用やバランスの悪さなどがあって、日常動作や学業に支障をきたす状態で、スポーツが苦手、作業が遅い、書字が下手などで明らかになる。

このような症状は、日常生活全般に影響するため、大きく自信をなくしていきかねない。LDと同様かそれ以上に苦手意識が育ち、苦手なことへの拒否にも繋がることも多くある。また、いじめやからかいの対象になることもある。

周囲はこのような状態に理解を示し、本人なりの努力や向上をきちんと評価することを心がけなければならない。この障害による不都合さは、周囲に理解されにくい、本人にはかなりのストレスになっているはず。

3節 主な発達障害の関係



(医療・個性的な発達をする子どもたちより)

第2章

1節 発達障害と食物アレルギー

消化機能と免疫機能の不全のため多くの発達障害の子どもは食物アレルギーを持っている。過敏な腸を持つ子どもの場合、完全に消化されない砂糖、アミノ酸は消化器官から血液中に入り込む。そして、免疫システムがそれを異物と判断し、アレルギー反応を起こす。

《注意すべき点》

- ・アレルギーを起こす食物を避ける
- ・消化を助けるための消化酵素を摂取する
- ・胃腸を丈夫にする方法を考える(腸の炎症が治ると食物アレルギーも治ることが多い)
- ・4日間の食事ローテーションを組む(アレルギーを起きにくくするため同じ食物は4日に1度だけ食べる)

2節 検査方法

・観察

ほほが赤い、耳が赤い、眼の下にくまがあるなどがアレルギーの兆候。行動の変化にも注意する。

・食事記録

食事記録を付ける。症状と過去1～3日に食べた物の関連を探すため、食事の記録をつける。

・血液検査

血液中の総IgEの値や、ある抗原に対して作られる特異的IgE抗体の値を調べる。特異的IgE抗体は大低RAST法と呼ばれる検査方法で測定され、食べ物アレルギーの血液検査といえばほこちらの検査をさす。特定の原因物質にどのくらいIgE抗体があるかを調べるが、段階は0～6まであり、0の陰性から数値が高くなるに従って陽性の確率が高くなる。しかし、実際は血液検査で高い値が出ても、アレルギー反応を起こさないケースもあるため、目安としての検査に留まっている。

・皮膚テスト

皮膚に直接食べ物を付けて調べるプリックテストと呼ばれる皮膚試験が一般的で、即時型アレルギー反応の検査である。これはアレルギーを皮膚に少量滴下し、針先で皮膚を押さえおおよそ15分後に反応を見る。パッチテストは遅延型アレルギー反応の検査で、絆創膏にアレルギーをのせて皮膚に貼り、48時間後に反応を見る。血液検査よりは感度が高い。

上記の検査結果だけでは不十分な場合がある。診断を確定するために以下の試験が行われる場合がある。

- ・ 除去試験

どの食べ物が原因かを特定するのに行われる。

疑わしい食べ物を1～2週間(目安)食べないようにし、症状の改善度で判断する。

- ・ 経口誘発試験

除去試験でアレルギー症状が改善された場合、今度は疑われる食べ物を実際食べてみて、アレルギー反応が出るかどうかで原因物質かどうかを診断する経口誘発試験をする。

軽いアレルギーの場合でも医師の指示で行われる。

症状が重い場合やその可能性がある場合は入院して慎重に行われる。

アレルギーテストは避けるべき食物を見付けるのに使い、その結果を観察する。

検査をしない場合のオプションとしては、もっともアレルギーの反応の起こりやすいグルテン、乳製品、砂糖、とうもろこし、大豆、イースト、ピーナッツ、卵、人工着色料、保存料を含む食べ物を避ける方法がある。

改善が見られれば、4日に1つずつ避けた食品を戻して大丈夫かどうかを試してみる。グルテンと乳製品は最後に試す。

3節 食事の改善

心と体が正常に発達し、機能するために必要な栄養素がある。自分の全ては、自分の食べるものによって決定される。自分の構成する全ての分子、細胞、すべてが自分の食べるものによって決定される。何を食べるのか、それがとても重要になる。

必要な栄養素は、ビタミン、ミネラル、必須脂肪酸、アミノ酸などである。野菜、果物、そしてたんぱく質の豊富なバランスのいい食事が大切である。

- ・ 野菜、果物には心身の健康を維持するビタミン、ミネラルと植物性栄養素が含まれる。
- ・ たんぱく質は体の構成や神経伝達物質に必要なアミノ酸をつくる。

- ・ 砂糖の摂取を減らすことは、苛立ちと集中を困難にする血糖値の急激な変化を防ぐ。
- ・ 人口着色料と甘味料は神経過敏な人を苛立たせ、行動問題の原因になる。

4節 食物アレルギー年齢別主要抗原表

	0 歳	1 歳	2～3 歳	4～6 歳	7～19 歳	20 歳以上
No.1	鶏卵 62%	鶏卵 45%	鶏卵 30%	鶏卵 23%	甲殻類 16%	甲殻類 18%
No.2	乳製品 20%	乳製品 16%	乳製品 20%	乳製品 19%	鶏卵 15%	小麦 15%
No.3	小麦 7%	小麦 7%	そば 8%	甲殻類 9%	そば 11%	果物類 13%
No.4		魚卵 7%	小麦 8%	果物類 9%	小麦 10%	魚類 11%
No.5		魚類 5%	魚卵 5%	ピーナツ 6%	果物類 9%	そば 7%
小計	89%	80%	71%	66%	61%	64%

(平成 14 年厚生科学研究報告 n=3882)

まとめ

発達障害というのは人それぞれ違い、どの子がどんな発達障害を抱えているのかというのは判断しにくいものなのだと感じた。

発達障害ということを知らなければ、障害を抱えている子と距離を置いて接するという人も少なくはないと思った。どんな障害にどんな特徴があるのか、詳しくとは言わないが、ある程度知っておくべきなのだと思う。そして、その子たちにはどんな関わり方をしたらいいのかをいうのも理解しておくことも必要だと感じた。

周りにそういった障害を持った子がいない場合、発達障害のことに気づけることが難しいと思うが、皆が発達障害の事についての理解を少しずつでも高めていき、障害を持った子に出会った時には手助けができるようなそんな世の中になるといいと思う。

1章の2節であったように、障害とせずに「個性」と捉える場合もある。皆一緒なのではなく、自分をしっかり持った個性のある子が好まれる時代に、どんな個性を持って成長していくのかそれもみどころであると思う。欠点ばかりを見るのではなく、違う角度から相手を見て接してみたらもっと大切な相手のいい面も見られるかもしれない。

発達障害の子たちが持っている個性を「個性」と認めてもらえたり、1つの部分で高く評価をしてもらえたりするのはとてもいいことだと思う。その子の世界も広がるし、周りへの影響も大きいと思った。

「発達障害だから」という簡単な言葉で相手を突き放すのではなく、もっと深く関わり相手を理解することがとても大切なことだと思う。そしてみんなが助け合っていていけるようなそんな暖かい世界になるといいと思った。